

大学におけるアクティブ・ラーニングの試み ーオバマ大統領広島訪問を題材にしてー

植西浩一

キーワード

教授・学習法 能動的な学習 認知プロセスの外化 ポリフォニック パネルディスカッション

1. 教育界の動向とアクティブ・ラーニング

学習指導要領の改訂を前にして、アクティブ・ラーニングに関わる言説が多く飛び交い、実践報告の数も目立って増えている。「アクティブ・ラーニング」なる用語そのものは、2017年2月14日に提示された新学習指導要領案には入れられなかったものの、これからの学びの方向性を示すものと言ってよい。

ただこのような授業の在り方の見直しは、今、急に起こったのではなく、教師主導の知識注入型一斉授業に対する批判は以前からあったし、学習者主体の学びの場を創ることの大切さは、折に触れて提起されてきた。また、我が国の授業の様子が変わりつつあるのも確かであるように思われる。これについて佐藤学は、次のように述べている。

板書をノートにうつす一斉授業の様式は今や"博物館"に入っている。先進諸国の教室は、小学校一、二年生は円座を組んで座る全体学習の協同的学びとペア学習、小学校三年生以上、中学校、高校は男女混合四人グループの協同的学びによって授業が行われるようになった。この変化は、興味深いことに、誰が言い出したわけでもなく世界各国ではほぼ同時に起こった変化であり、私は「教室の静かな革命」と呼んでいる。この「教室の静かな革命」は、私の観察した経験(25年間で20カ国以上の300校以上を訪問)によれば、1980年代にカナダを中心に広がり、1990年代前半にアメリカ、後半にヨーロッパ各国に普及し、2000年代以降はアジア諸国に浸透した。^{注1}

このような動きに拍車をかけているのが、前述の学習指導要領改訂を見据えた文部科学省主導のアクティブ・ラーニング導入の動きである。それは、これからの学校教育の充実に向けた望ましい動きである反面、トップダウン的な性急さが危惧されるところでもある。文部科学省自体も、次のような見解を示している。

一方で、こうした工夫や改善の意義について十分に理解されないと、例えば、学習活動を子供の自主性のみに委ね、学習成果につながらない「活動あって学びなし」と批判される授業に陥ったり、特定の教育方法にこだわるあまり、指導の型をなぞるだけで意味のある学びにつながらない授業になってしまったりという恐れも指摘されている。^{注2}

本稿では、このような状況をふまえつつ、大学での授業を実践の場とし、アクティブ・ラーニングを目指した授業を行い、その分析を通した私見を述べたい。

2. アクティブ・ラーニングの概念規定

アクティブ・ラーニングは、当初は、講義一辺倒の大学教育の改革を意図して用いられていた。「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)」^{注3}には、次のように示されている。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

ここに示されているように「アクティブ・ラーニングは、能動的な学修への参加」^{注4}に他ならないのだが、気になるのは「教授・学習法の総称」という文言である。すなわち「教授・学習法」とあるように「方法」の問題ととらえられているのである。後述するように論者は、アクティブ・ラーニングを学修(学習)観の転換を含んだものと考えている。それは、単なる方法の問題ではなく、「学びとは何か」という根源的な問いに関わり、学習観の転換を迫るものである。

これに対し、溝上慎一は、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」^{注5}という定義付けをしている。ここでは、「あらゆる能動的な学習」という文言が使われており、この点にも関わって溝上は、この書でさらに「教授パラダイムから学習パラダイムへの転換の含意」(P33)という説明を加えている。また、溝上の概念規定では「認知プロセスの外化を伴う」という部分も重要である。これについても、さらに溝上の説明をみておく。

ちなみに、書く・話す・発表する等の活動を求めることは、同時に、認知プロセスの外化を求めることでもあり、定義のなかで重ねて説明する必要はないとも言える。しかし、活動させればそれで良いというような、認知機能が知識と絡み合っどどのように働いているかまで目が向かないアクティブラーニングの実践が、実際には少なからずあり、アクティブラーニングには、社会の変化への対応として、認知機能の育成、すなわち技能・態度(能力)の育成という課題も込められている。これらのことをふまえて、定義では二重表現を採って、活動への関与と、活動に関連する認知プロセスの外化、その十分な協奏を強調している。^{注6}

ここで溝上が述べているように、アクティブ・ラーニングは、学習者の主体的・能動的な活動であることに加えて、認知プロセスの外化が学びの中に位置づけられていることが重要であると論者も考える。そこでおさえておかなければならないのは、認知プロセスは、一人ひとりの学習者によって異なるということである。すなわち、一人ひとりの学び手の認知プロセスが外化され、それがポリフォニック^{注7}に響き合って、互いの認識を刺激する、そのような学びの有り様がアクティブ・ラーニングでは求められるのではなかろうか。

学習者の言葉の中にそのような異なる認識が見え、それらのせめぎ合いの中で揺さぶりがかけられて認識が変容していく、まさに認知プロセスが外化される学びの一つの姿としてパネルディスカッションを取り上げたい。

3. パネルディスカッションの概要

本稿で取り上げる大学の授業に於けるパネルディスカッションの実践の概要を、以下に示す。

1) 題材 オバマ大統領広島訪問の成果と課題ー核なき世界の実現を目指してー

この題材で、今回のオバマ・アメリカ大統領の広島訪問の意義はどこにあるのか、また核なき世界を現実のものにするには何が課題で、私たちには何ができるのか。何をこそしなければならぬのか。様々な角度から学生たちに考えさせたいと意図した。

2) 授業科目「日本語文章表現法」、受講生は、3年生19名、中国人留学生2名、4年生1名

3) パネルディスカッションの位置づけ 意見文作成のための多様な視点の獲得、自らの考えやその根拠の見直しのために、パネルディスカッションを位置づける。そこで溝上の言う「認知プロセスの外化」を目指したい。

4) パネルディスカッションの実施日時 2016年7月9日(土)第2限10時40分～12時10分

5) 本時の目標

①論題に対する様々な立場から意見を出し合い、相互に理解を深める。

②討論を通して論題に対する理解を深め、よりよい考え方や解決策を求める。

③意見を述べたり、相手の意見に耳を傾けたりすることの意義を理解し、対話を通して問題を解決していくという姿勢を身につける。

6) パネルディスカッションのタイムテーブル(60分)

- 1 司会者による開会宣言・パネルの目的・進行等の説明2分
- 2 代表討論者による意見発表ABCDE (被爆三世) 4分×5 計20分
- 3 司会者によるまとめ2分
- 4 代表討論者による自由討議 10 分
- 5 司会者によるまとめ1分
- 6 フロアからの発言 11 分
- 7 司会者によるまとめ2分
- 8 代表討論者の最終発言 ABCDE 2分×5 計10 分
- 9 司会による総まとめ2分

4. パネルディスカッションの実際

1)「代表討論者による意見発表」の概要

A オバマ大統領の広島訪問は、核廃絶への第一歩で、広島の人々の願いをくみ取ることができた訪問。「みんなで未来をつくろうキャンペーン」の1400名からのオバマ大統領への手紙でも、謝罪は求めている。演説内容も核廃絶のための未来に向けての言葉。Weという主語は、核廃絶はアメリカだけではなく、世界中が取り組まなければならない問題であることの表現。今回の訪問を、長崎の被爆者もアメリカの新聞も評価している。

B 広島県在住の有識者の意見を見ても、成果があったことがわかる。アメリカにおいて現在でも原爆投下を疑うのは難しい問題だが、オバマ訪問によって、戦争そのものを考える機会が増えた。アメリカ人の46%が原爆投下は正しかったと考えているというデータがあるが、そう考えている人の多くは、60代以上、70代以上である。オバマ訪問は、若い人たちに衝撃を与えている。ここで、謝罪がなかったことはどうなのかと問う必要はない。悪いのはアメリカという意見が広島にはあるが、それは危険。過去を忘れてはいけませんが、メスを入れる場所が違う。戦争そのものを憎むべき。

C 17分間の演説の内容を問わなければいけない。資料館を見たり、被爆者に会ったりして自分自身がどう思ったかがまったくない。広島に来て読む意味が希薄。また、資料館の見学は5分間だけ、これで見学したと言えるのか。アメリカの核事情も問題となる。2009年のプラハ演説でオバマ大統領は核廃絶を宣言し、ノーベル平和賞を受賞した。アメリカとロシアは、核弾頭の備蓄量を1550個に減らすという条約を締結したが、アメリカは、同時に、向こう30年で1550個は持っている核の能力を向上させる計画を立てた。これに対してオバマ大統領は、ためらいがなかった。演説内容と矛盾するアメリカの核の実態がある。

D オバマは何のために広島に来たのか。演説内容に具体性がない。「恐ろしい核の力に思いをはせ、死者を悼むため」と言うが、平和記念公園の滞在は、わずか2時間で、資料館を訪れ、慰霊碑に献花しただけだ。日本人慰霊碑からわずか150m先にあった韓国人の慰霊碑には向かっていない。韓国人の被爆者数は、推計で70000人とされている。これだけの人が被爆しているのに、なぜ日本人の慰霊だけで終わらせてしまったのか？

E プラハ演説が30分前後であったのに対し、広島演説は17分と短い。プラハでは、主観を交えながら、自分のすべきことを明確に述べた。アメリカが核兵器のない平和な世界にすることを約束すると宣言、「私の政権では」という言葉を使い、具体的政策を示した。広島演説では、オバマ大統領が思ったことは、「私は普通の人にはもう戦争を望んでいるとは思いません」ということのみ。第三者の目で語っているような印象。ノーベル平和賞を受賞したのに、オバマ大統領には、キング牧師やマザーテレサのような実践がない。ニューヨークタイムスやルモンドによれば、オバマ大統領は、歴代の大統領よりずっと少ない核削減しか実現できていない。今回の演説は、単なるパフォーマンス。

2)「代表討論者による自由討議」から「司会による総まとめ」までのプロトコル

- 1司 こういったみなさんの、代表者の方の意見が出そろったところで、代表者の方による自由討議を行っていただきたいと思います。では、意見のある方は挙手をお願いします。
- 2司 代表者の方、お願いします。
- 3B はい。
- 4司 はい。じゃあ、Bさん。
- 5B えっと、純粋な質問なんですけど、Eさん、被害者への対応とおっしゃっていたじゃないですか。アメリカ、オバマさんの被害者への対応が求められるとお話しされたと思うんですけど、具体的に、今から、被害者への対応ってというのは、どうですか。対応が求められるって、どういったものか。具体的な被害者への対応ってどういったものがありますか。
- 6E あ、それは。
- 7司 はい、Eさん。
- 8E はい、それは、なぜ広島に早く来なかったのかということです。71年も経って、その当時、被爆した方は80も越えている方が多いのに、なぜ、そのことからわかりますよね。71年も年月が経っているってことは被爆者が高齢で、会える機会も少ないし、そうやって、別に謝罪しろとは言っていないんですけど、その広島は、今回の演説を言うにも、もっと早くできたんじゃないかと思います。
- 9司 他の方の意見は。はい、Cさん。
- 10B はい。(Cさんに先立って)
- 11B 早急さがあるということ？
- 12E それが、広島に来るということです。
- 13司 はい。ありがとうございます。はい、では、他の方の意見は？
- 14C はい。
- 15司 はい。Cさん、お願いします。
- 16C はい、えーっと、Aさん、Bさんへの質問なんですけど、二人の意見は、ざっくりまとめると、広島に来たことが意味があるとか、広島への訪問はちゃんと成果があったということになると思うんですけど、あの、えー、広島訪問に成果があったというのは、具体的にどんな、目に見えた成果というのがあったんでしょうか？
- 17B はい。
- 18司 はい。Bさん。
- 19B 先ほども述べましたように、有識者の、この成果があったという自覚、一人ひとりの意識が違うと思うんですよ。こういった議題に上がっていることもそうだし、なんていうんですかね、改めて広島に来ることによって、若い人もオバマさんが広島に来たんだとただ沸き立つだけでなく、それにかからめて、原爆とは何か、広島とは何かというのを想起させる、そういった効果はあったと思います。成果は、あったと思います。

- 20 A はい。
- 21 司 はい。Aさんお願いします。
- 22 A えーっと、わたくしも調べてきたんですが、NHKの番組、NHKが調べた被爆者約200人を対象に行ったアンケートなんですけど、広島訪問についてどう思いますかという問いには、約9割が訪問を評価しており、これに関しても、被爆者の方が今日の訪問に意義があったんだと考えること、また先ほどアメリカの誌面について話しました。えー、タンパベイタイムズとロサンゼルスタイムズについて話しましたが、アメリカの実態そのもの、アメリカの人たちは原爆を落としたことはすごく荣誉あるというか、原爆が落ちたことによって、戦争が終わったと考えている人たちなので、えー、その人たちが、えー、まあ、核廃絶に、核兵器の保有は平和を希求するのに誤った道であると、意識がちょっと変わってきたというところに成果があるかなと思っています。以上です。
- 23 司 これについては、もう？
- 24 B はい。
- 25 司 はい。
- 26 B Dさんに意見なんですけど、外国人の慰霊碑に何もふれなかったことについて、でも、やっぱりメインは広島なので、そこはちょっと求めすぎなんじゃないかと私は思ったんですけど。メインは広島であって。
- 27 D 広島がいちばん被爆したから、広島を中心にとってことですか？
- 28 B そういう意味ではなくて、訪問のメインは広島に来るっていうのを、オバマさんが考えてきたと明言して、広島に来るというのが目的なので、そこであえて外国のものにふれたら、ちょっとややこしくなるんじゃないかなと、やっぱりそこはやっぱり純粋にまっすぐ広島を見ていただいて、訪問されたと思うので、うーん。
- 29 A 私もBさんの意見にかぶせての意見なんですけど、その朝鮮の人の慰霊碑に追悼する場面があったとして、アメリカ側がどう思うかっていうのも、今回は配慮した訪問だったのかなと。
- 30 D じゃあ、配慮してしなかったために、朝鮮の方の批判的な意見がだいぶ多く見つかったんですよ。なので、行かなかったがためにそういうことも起きちゃうので、そこはその、自粛したがために起こった問題も出てきてしまうので、それをどうにかすべきだったのかなと私は思っています。
- 31 E はい。いいですか？
- 32 司 Eさん。
- 33 E Dさんに付け加えなんですけど、今回のオバマさんの訪問の目的は、広島への謝罪じゃなくて核兵器に対することだったと思うんですよ。で、核兵器の被害者は広島であり、長崎であり、朝鮮の方たちであり、アメリカの兵士、捕虜の方も含まれているので、やっぱりそこは平等にすべきだと思うんです。その広島を訪れる、広島だけではなくて、核兵器のことを言っているの、広島その、だから、そこは核兵器に重きを置くべきであって、もちろん戦争があり、核兵器がありだったんですけど、その戦争と核兵器を同じにしてしまったら、もうそれは意味がないですね。戦争をするんだったら核兵器を使っていみたいなそういうふうになるから、戦争が悪いのは大前提なんですけど。今回は、核兵器のことを言っていて、オバマさん自身も核兵器のことを話しているから、そこはあまり意味をはき違えないほうがいいのかなと思いました。で、その、Aさんに質問なんですけど、その他国が広島、長崎、他国の代表が広島、長崎の訪問をすることのきっかけとなるって言ってましたが、具体的にどの国が来ると思いますか？その割と来ている、来ていらっしゃるの、外国の大臣なり、在日大使なり、実際、私も平和公園に行って、8月6日に式典に出ているので、被爆者の遺族としてけっこう見るんですよ、大臣を。各国の。で、具体的にどの国の大臣が、いったい来たらいいと思いますか。
- 34 A 今、問題になっているのは、北朝鮮……。
- 35 E でも、無理ですよ。はっきり言って。
- 36 A そうなんですけど。でも、いちばん核問題で大きいのは北朝鮮だと私は思っているの、今、現段階では、北朝鮮のけっこう一方通行的なところがあるので無理だとは思いますが、今回のことをきっかけに、北朝鮮も、その批判が出ているということで、オバマさんが広島に来てくれたというニュースは伝わって

と思うので、まあ、北朝鮮の人たちも核について少しでも考えてもらえればと。

37 E 伝わってますかね。そういう報道はなかったですよ。制限されているんで、国内には入ってこないはずなんです。だから、ここでは、そのCさんが言ってくれた条約なんですけど、アメリカとロシアが、核兵器、核実験禁止条約を結んでるんですけど、実際は、ロシアは、まったく反応してないんですよ。今回のことに関して、オバマ大統領が広島に来たことに関しては反応してないから、別にオバマさんが広島に来たって、そんなに変わらないんですよ。逆に、その内容にふれてないからもあるんですけど、その今までもぜんぜんアメリカの関係者が来なかったわけじゃなくて、駐日大使とか、最近では、ケネディさんも来てますよね。それでも、核兵器のことはまったくふれてないから、ずるずるずるずる引きずってきたわけで、さらに今回も核兵器のことにふれていないから、まあ、成果は、目に見えた成果というのはなくて、ほんとに。そういうアンケートに出たとしても、それは一部の本当に、興味がある人にだけだと思うんですよ。だから、そういうことに関しては、どう思いますか？本当に成果があったって？

38 A 核兵器の廃絶が進むかってことですか？

39 E そのオバマさんが、この演説をしたことによって、本当に核兵器の廃絶が進むのかとか、歴史認識も含めてどう思いますか？ 実際現実をみると。

40 A 現実を見ると……。

41 B はい。

42 司 はい。Bさん。

43 B えっと、核廃絶の件もそうなんですけれど、やっぱり、こうして、やっぱり核ミサイルをアメリカ持ってるんじゃないとか、3人から意見が出たんですけど、持っているじゃないとか、いや広島来たけれど、こうこうじゃないとか、でも、けっきょく、そう、オバマさんが来たことによって、アメリカの現状を、私たちが、でもそうじゃん、アメリカ持ってるじゃんとか、ぜんぜん会議でも、ノーベル賞とったりしても、ぜんぜん広島にどうのこうのとか、謝罪をどうとか、海外の方にも考えるきっかけになってるじゃないですか。それそのものが、たぶん成果だと思うんですよ。どうでしょう？

44 A あ、はい。えーっと。アメリカが、核を保有しているという意見だったと思うんですが、それは、まあ、言い訳になってしまうかもしれないんですけど、理由があって、えーISというイスラム過激派組織のえーまあ、ほうのかねあいというか、そこに対する体制もしっかりやっていかないと、なくてはいけない、シリアに対しても対応しなくてはならないという理由が、柔軟な対応をしなければアメリカ人の生命に危険が、生命が危険にさらされてしまうので、まあ、アメリカのなんといったらいいですかね、人命を守るためではないですけども、えー、イスラム過激派が、過激派組織を鎮圧ではないですが、押さえるための活動にちょっとつながっているんで、核保有、アメリカの核保有が、じゃあアメリカは核を持ってるじゃないと言われているんですけども、まあ、日本で言う自衛隊みたいじゃないですけども、国民の命を守るための核保有であると考えています。

45 司 はい。えーっと、ですね。(挙手を見て)今のことに関しての意見ですか？

46 C はい。

47 E はい。

48 司 今のことで、EさんとCさんの発言で締め切らせていただきますので、これで終わりにしたいと思います。はい。

49 C えーっと、さっきISとかの過激派の牽制のために核持ってるとおっしゃっていましたが、えっと、では、2009年のプラハの演説で核兵器廃絶宣言をしたときは、まだそんなISが活動していたわけではないですし、本当に核兵器廃絶って言ってるんだったら、そのときにもう、そういうなくしていこうという行動ができたはずなんです。それでも全然しないで、あのEさんがさっき言ったように核爆弾、核をこの大統領になってから700ちょっとしか、削減、減らしていないっていう、そのEさんが指摘したとおり言ってることとやることがあまりに矛盾しすぎていると思いました。その核兵器で国民を守るため、国民を守るために核兵器を持っているっていう、その考え方が、その力で力を押さえるっていうなんかその、

戦争をやる一歩手前のような考え方のような私は気がするんですよ。だったら、なんかその、意味がないっていうか、それこそほんとにもう、さっきから言ってますけど、矛盾しているというか、ほんとにもう言ってることとそのなんかアメリカのためというのと、核廃絶というのも、矛盾しているような気がするし、有言実行してほしいなっていうなんか気が、今、Aさんの意見を聞いて思いました。ごめんなさい。なんかあんまりまとまってないんですけど。

50 司 はい。ではEさん。

51 E Cさんとも似ているんですけど、そのアメリカが自衛のために持っているってこと、だったら核兵器を持っているということについては、Aさん、しかたないと思うんですか？そのアメリカは、自分の国を守りたいという、そのIS、イスラム過激派に対する脅威として核兵器を持っているというのを私も見たことがあるんですけど、それについてはしかたないと思うんですか？

52 A ええ、まあ、あの。

53 司 どうぞ。

54 A 今回、まあ、いろいろ事件があったじゃないですか。で、たくさんの人が、日本人も含め、たくさんの人が命を落としていて、このままあの人たちをほうっておくとたいへんなことになるんじゃないかなと私は思うんですよ。なので、ほんとに最終手段だと私は思いますけれども。

55 E じゃあ、その人たちに原子爆弾を落としてもいいっていう考え方ですか？最終ってことは？

56 A まあ、極端に言ったら、そうですね。

57 E そこなんです。だから、原子爆弾と爆弾の違いがそもそもあって、その原子爆弾を使うことが嫌だというのが広島意見なんです。広島の人が核兵器をなくそうっていう、核兵器をなくそうっていつてるんですよ。だから、そのオバマさんが核兵器をなくすと言っているのになくなっていない現状は矛盾しているし、自衛のために持っているというのも、おかしいと思うし、その兵器を持つことに関しては、まあ万国共通だと思うし、日本も自衛のために兵器を持っているんですけど、核兵器がよくないってことなんです。だから、原子爆弾を使ってほしくないというのが遺族の考えで、そこを踏みにじってるから、今回オバマさんの訪問に対しても批判的な意見も出るし、私は遺族なんでわかるんですけど、親もよけいなこと言うならオバマさんに来てほしくないって、だから、来てほしい、来てほしいって考える人もいるんですけど、逆に気持ちを踏みにじることを言うなら来てほしくない、まあ、実質、現実的にみて、北朝鮮とかがまあ戦争を起こすかもしれないという現実がわかるから、みんな、だから、その、将来、核兵器がなくなるということは本当に理想に近いことなんですけど、でも、オバマさんが言っている以上は、核兵器をなくすべきなんです。だれが悪いとかじゃなくて、戦争が悪いのが大前提で、アメリカもその原爆を落としたのが間違いだというのがわかるんですけど、実際、減るような活動をしていないから、そこがいちばんの問題であって、人々の意識は二の次なんです。まず減らしてほしいというのが大前提なんで、そこに関してはその成果はまったくないと思います。

58 司 では、ですね。こちらで、いったん締め切らせていただきます。では、ですね、あのかなり白熱してして、グローバルな展開にもなったんですけど、まず、来た成果がけっこう多くいわれたと思うので、成果があったという自覚、こちらですね。グラフにもありましたが、7割以上の方が成果が上げられているというのがありましたし、戦争について想起するきっかけになった、9割以上が評価をしている。これだけでも、十分な成果が上げられていたんじゃないか、というのと、やっぱり核はもう完全になくすべきである、でも、今回のように、演説とアメリカの事情であったり、世界中の核兵器の実情は矛盾しているのだから、来てもあまり意味がなかったし、ちゃんとした成果、もうちょっと目に見えた成果が上げられていれば問題ないのですがという意見が出ました。かなり白熱していたんですけども、これに関してですね、実はフロアの方からも発言を、質問であったり、意見であったりというのを受け付けたいと思います。では、手を挙げて、発言していただきたいと思います。

59 F はい。

60 司 はい。Fさん。

- 61 F はい。えーっと。質問というか、ちょっと聞きたいことがあるんですけど、AさんとEさんの中に、We に対しての意見の違いがあったんですよ。Aさんは、We っていうのを使うことによって、世界中の問題であることを表現しているんじゃないかというふうにおっしゃっていたじゃないですか。でも、Eさんの的には、主観じゃない、ちょっと客観的な表現として使われているみたいなことが言わ、おっしゃっていましたよね。で、それで、なんかその意見の違いがあって、私は、なんか、確かに、どっちもそうだなあみたいな感じを持ったんですけど、それぞれで、あの、いやでも、これはこうなんじゃないかというそういう意見はありませんか？
- 62 司 これについては。これに関連して、何か意見がある方いらっしゃいますか？Aさん、お願いします。
- 63 A ……。
- 64 F じゃあ、お互いの意見についてどう思いますか？ 確かななあとか、でもやっぱり自分はこっちのほうが強いなみたいな。
- 65 A 確かに、ひとり、オバマ大統領の演説であつたっていうことを考えると、確かにEさんの言っているように抽象的だったとか、具体的ではないというのはすごくわかるんですけど、私は、やっぱり先ほど述べたように、We の部分が(資料を採す)、使われているのが、まあ、「私たちは」っていうことがけっこう使われていて、まあ、どの文章も、「私たちは」、「私たちは戦争そのものへの考え方を変えなければいけません」とか、演説には、「私たちは」、「私たちは」と使われていて、まあ、なんか、オバマさんは、その演説は自分の中にとどめておくれじゃなくて、全体というか、他の人に聞いてもらうっていう意味を持っていて、なので、やっぱり、他の人も、巻き込んでというか、それで、「We」、「We」と使ったのではないかなと私は思います。Eさんの意見に対して、それは違うんじゃないかとかそういう意見ではないです。
- 66 E はい。
- 67 司 Eさん。
- 68 E 確かに他の人も交えてというのは大切なことだと思うんですけど、その、アメリカとしての立場に対しては、やっぱりIを使うべきであると思って、そのアメリカの大統領としての自分の意見というのが、今回、全然感じる事ができなくて、そのほんとにCさんが言ったみたいに、別にこれは、ホワイトハウスの前で演説しても変わらなかったんじゃないかと思って、その広島に来たんだったら、やっぱり自分の意見も交えるべきだと思うし、まあ、あの最近有名な〇〇さんじゃないですけど、ほんとに第三者の目線で責任転嫁っていうようにも感じる事ができて、その原因は、やっぱりプラハ演説は、ほんとに自分の思ったこと、自分の感情、わりとプライベートなことまで述べているので、やっぱりなぜそんなに差ができたのかなというふうに疑問に思います。
- 69 B はい、そのスピーチのことについて言っているんですか。IとかWe とかの話というか、スピーチについてなんですけど、話す主体がだれかということで、いろいろ質問とかもいただいたと思うんですけど、広島に来たからこそ、アメリカの代表として、第三者的に話すというのは、私は正しいと思います。で、まあ、なんでしたっけ、Iで言った部分が、戦争はいけないものでしたっけ？
- 70 E はい。
- 71 B それ、ですね。あたりまえのことっていうのは、そうなんですけど、そのあたりまえのことって、ずっとあたりまえだ、あたりまえだと言われてきて、ほんとに、あーあーって、軽いものだったんですね。ああやって声ある人、力ある人があらためて戦争はいけないんだっていうのを広島で発言するということには、すごく意味があることだったと思います。以上です。
- 72 司 はい、ありがとうございます。
- 73 D はい。
- 74 C はい。
- 75 司 おっと、今のに、関連した意見でしょうか。
- 76 D はい。
- 77 C はい。

78 司 では、Dさん。

79 D 今、3人の意見を聞いて、私が思ったことなんですけど、えーっと先ほどBさんが言ったように、オバマ大統領がアメリカの代表として第三者目線で言うことはいいことだ。でも、Eさんは、その具体、違う、違う、道徳だとか、抽象的な言い方で、ここはその私は気になるという、でもBさんはその演説はほんとに他の人を巻き込んで世界中が取り組める、取り組むべき問題だという、ここからこの演説自体は、私は、もう広島でやらなくてもと思ったんですね。むしろなんかこう、もっと大っきいホワイトハウスだとか、大っきい舞台で言ったら、その世界中のもっと多くの人たちが核廃絶について考えるきっかけになると思ったので、そこはもう、今後の演説は、大っきい舞台で言ったほうがいいと思うことが一つと、それで、また別に、広島に来て感じたこと、思ったことを具体的にここで演説するんだっただけだと思いました。以上です。

80 A はい。

81 司 はい、どうぞ。

82 A 申し訳ないです。あの広島に地になんか来なくてもいいって言ったじゃないですか、でも、あの演説の中に、「私たちは、ここに、この町の中心に立ち、原爆、原子爆弾が投下された瞬間を想像せずにはいられません」っていうフレーズが入っているんですよ。実際にこの場所に立たないと感じられないものってのは、オバマ大統領にあったと思うので、広島に地に来たことは私はとてもよかったかなと思います。

83 D でも、時間がとても短いのが。

84 司 はい、はい。

85 司 Dさん、手短にお願いします。

86 D 時間がとても短いじゃないですか。それで、G7のついでみたいな感じで、2時間だけ広島に来て、5分間だけ資料館見て、それで演説ってなると、そこだけ見ると、まあ、日本人、広島人としては、何がわかったの？、もうって……。

87 B 収容人数とか、そういうものは関係ないと思うんですよ。広島に来て、さっきAさんが現地に立って話すというのが、そうだし。うーんね。

88 E 立っただけで、わかりますか？(口々の発言があるが、聞き取れない。フロア、ざわめく)

89 司 Cさん、お願いします。

90 E 立っただけでは、わからない。

91 司 Bさん、答えていらっしゃるんですけど、いいですか？

92 司 Cさん、先にどうぞ。Cさん、いいですか。じゃあ、Bさん。

93 B 立っただけでわからないのは、私たちも同じなんです。実際、広島に住んでいて、原爆のことをわかるかって言ったら、実際に現実に体験してないんだから、それは、オバマさんも同じで、だからこそ、オバマさんに、何かできるかっていう、精一杯考えた結果なんですね。時間がなくて、滞在時間が短かったっていうのは、すでに報道でみなさんもお存じのとおりですし、でも、その時間を割いてまで、5分間しか見てなかったという意見もあるんですけど、来て、まあ、アメリカの大統領だからこそ、主観でもものが言える立場じゃないです。あれだけの大きな力を持ったアメリカの大統領が、自分の意見をぱっぱぱつと、ぺらぺらしゃべったら、それこそだめですよ。大ブーイングなんで、ほんとに第三者としてアメリカの代表として、あまり主観は交えずに述べたって、簡潔に述べたってことに、ほんとに意味があると私は考えました。以上です。

94 C じゃあ。

95 司 はい、じゃあ、Cさんで、Fさんの質問には締め切らせていただきます。

96 C ごめんなさい。本当にフロアのみなさんの時間をごめんなさい。えーっと、まずBさんがおっしゃってた、あの短い時間の中でも来たことに意味があるというところは、あの、大統領になってから、任期8年であった中で、なんでこの任期の最後のほうで来たのかっていう、もっといっぱい時間あったじゃないかって、年単位で時間あったのに、なぜ来なかったんだっていうところが、ちょっとつっこみたいところで、えーっと、演説のWeのことに限っては、そのまあなんだろう、Eさんだったら主観で話してほしかったって

うので、Aさんだったら、なんかそのなんだろう、アメリカを代表してという、世界の人をなんか代表してみたいなその私たちって使い方なんで、その演説内容をどっちでとるか、どっちでその読み取ったかによって、たぶんそのWeに対する考え方が変わると思うので、そこはなんか、どっちがよかったっていうのは、一概には言えないんじゃないかなっていうのが私の意見です。

97 司 ありがとうございます。で、ですね。フロアの方、おまたせいたしました。(フロアから笑) 質問、意見のある方、挙手をお願いします。

98 司 はい、お願いします。お名前と。

99 G Gです。Eさんに質問があって、キング牧師とマザーテレサの話が出てきたときに、なんでその話と思ったんですが、えっと、削減のためにオバマ大統領が何をしてきたか、何をすべきかというところにつながって、なるほどそこにつながるのかと思いました。で、そこで、このキング牧師とマザーテレサの話が出てきたことと、オバマ大統領が具体的に何をすべきかということを、具体的にすべき行動をどうお考えか教えてください。

100 司 はい、Eさん。手短にお願いします。

101 E 具体的にオバマさんがすべき行動は、やはり核廃絶に向けての行動だと思います。で、まあ、キング牧師やマザーテレサ、もっと他にもノーベル平和賞を受賞した方はいるのですが、具体的に有名な方2人を挙げたんですけれども、やはりノーベル平和賞は、平和賞とついているので、そのすべきことは、その世界平和に向けてなんですけど、そのオバマさんが実際にやっていることは全然世界に影響していないので、また、これから、そうですね、平和賞を受賞したのだから、もっとやってほしかったというのが、私の意見です。もっと核兵器を廃絶してほしかったです。

102 司 はい、ありがとうございます。じゃあ、では、ですね、時間の関係もございますので、申し訳ございませんが、こちらでみなさんのGさんの質問に関しては締め切らせていただきます。えっとですね、まあ、Weというね、演説に使われていたWe部分に関して、あの、かなり白熱した討論をしていただきましてですね、あの思うところがいっぱいあったでしょうが、胸の内に秘めていただいて、申し訳ございません。やっぱりですね、オバマさんの演説であれば、それは、抽象的なんじゃないか、第三者目線であって主観はないんですかと、でも、Iはあたりまえの部分にしか使われていなかったけど、でも、広島で話すことにやっぱり意味がある、大統領の、アメリカの大統領だからこそすべきこと、広島に立って、あたりまえであるけれども、とても大切なことを言うべき、これはたいへん、すごく意味のあること、来なかったことだから、すごく意味があるんじゃないかと、そして、Cさんにきれいにまとめていただきました。一概には言えない、よかったか、悪かったかは、一概には言えないと。やっぱりキング牧師、マザーテレサとオバマさんの共通点、ノーベル平和賞、キング牧師とマザーテレサはですね、もう具体的にいろんな成果を、成し遂げました。オバマさんは、どうなんですか、演説だけですか、やっぱり具体的には核廃絶をやっていただくことが一番なんではないのかと、そういった意見もありました。では、ですね、以上の今までの代表者の発言、フロアからの発言を含めまして、討論者の方による最終発言をしていただきたいと思います。今度はですね、Eさんからずらっとお願いいたします。

103 E はい。今回のみなさんの討論を聞いて、私はやっぱり納得のいくものではなかったんですけど、そのCさんがきれいにまとめてくれたように、WeとIに関して、私もすごくひっかかっていたところで、でも、やっぱり立場は、どっちの立場、アメリカの立場として聞くのか、日本人、被爆者遺族として聞くのかによって、その一概には言えないということはすごく考えさせられました。そのAさんBさんが言ってくれたことに関しても、やはり批判的な意見があまりないっていうのは、私も調べていて思ったことですし、まったく無意味だったとも思わないので、今回の討論会で、いろんな意見を深められて、純粋に勉強になりました。以上です。

104 司 はい、ありがとうございます。では、Dさん。

105 D えーっと。Bさんから、考えるきっかけになったという成果があったというのがありました。オバマさんが広島に来て、成果があった、ここは、すごく私も納得のいく意見で、その、それでも、考えるだけで

は何も変わらないと思うので、そこで、オバマさん、例えば、道徳上とか言っていたんで、例えば、アメリカのなんですか、教育方針、州によって違うっていうこともあるんでしょうけれども、まあ、教育を変えるだとか、教育を変えるっていうことは、ちょいちょいやっているんで、そこはいいとして、もっと具体的に何をすべきかっていうことを、これからみなさんと、世界中のみんなが、考えていかなければいけないことだなあと思いました。

106 司 はい。大丈夫ですか？ ありがとうございます。では、Cさん。

107 C 私も、その、あのう、Bさんのここでも言われた、こういうふうを考えるきっかけになる成果があったというのは、とても納得ができました。実際、その、オバマさんが広島に来なかったら、こういう授業もたぶんしなかったって考えると、やっぱりそういう考えるきっかけになるっていう成果っていうのは、とても大きかったんだなっていうのは感じました。でも、やっぱり、その、調べていく上で、やっぱりその、今回の演説とか、プラハでの演説の内容と、やっぱりその、今、オバマさんが核に対してやっている行動というのが、矛盾しているんで、そういうのをまあ、オバマさんに伝える活動みたいなのがあったら、ちょっと参加してみようかなみたいな気にもなってきました。まあ、やっぱり、オバマさんが核廃絶に向かっていろいろやってるっていうのは、行動してるってのもわかるので、もうちょっと頑張れるようにサポートするってわけでもないですけど、何か自分たちも行動が起これたらなっていうふうに感じました。以上です。

108 司 はい、ありがとうございます。じゃあ、Bさん。

109 B えー、今回の討論で、すごくグローバルな部分までメスが入れられて、核についての保有、アメリカと広島に偏らず、しばられず、他の面でも、ほんとにわかりやすいデータがあり、E、D、Cさんから、すごくいいものを吸収できたと思ったんですが、やっぱり、そうですね、こうやって、今までふたをしていた問題に声が上がってきてるんですね。その、核であったりとか、オバマさんが来たから、来たその内容がいいか悪いかだけじゃなくて、そのまあ、賛成、反対を含めての成果っていうか、アメリカの核の現状を知りたいとか、やっぱり矛盾しているのは、すごくわかるんですよ。アメリカは、実際、核も持ってるし、それを含めて、やっぱり、訪問っていうのは、きっかけ、なんかアクションがないと、ふたをしていたことから声が上がらないので、ふたをはずすきっかけには、まあなったかな、落としぶたにほんとになったかなっていうのは感じました。以上です。

110 司 はい、ありがとうございます。最後にAさん、お願いします。

111 A はい、えー、今回三人の意見を含めて、Bさんの意見も含め、まあ、今回の訪問に意義があったという意見は、私の中で変わらないんですが、また、確かに、三人の意見を聞くと、アメリカも核持ってるじゃんとか、矛盾しているんじゃないかというふうに指摘をされまして、まあ、やっぱり、私は、Eさんに、その、えー、過激派に原爆を落としていいのかと指摘をされましたが、確かによく考えたら、そうではないなと。その、被爆者は、爆弾をなくしてほしいじゃなくて、核爆弾をなくしてほしいっていう考えがあったというのは、まあ、その、Eさんがそのことに対して追求してくれたおかげで、私も考えることができました。なので、まあ、オバマ大統領は、今回の訪問をきっかけに、これからどういう行動をしていくのかが問題であるかなというふうに思います。

112 司 はい、ありがとうございます。じゃあこちらで、パネルディスカッション、すべて終了いたしました。えっとですね、私めが、僭越ながら最後しめさせていただきますが、えっとですね、まあいけばん最初にも言ったんですけど、成果と課題というわけですね、賛成、反対の二極化というわけではなくてですね、成果の中にもこういった意見、こういった意見があって、課題の中にもこうこうといった意見と様々な意見がありました。そしてですね、代表の方に最後に言っていただいたように、様々な意見があって、自分の意見もあるけれど、こういう意見もあるんだなということがわかりましたというふうに、代表の私たち自身にもたくさんの成果がありましたし、フロアの人たちもたくさんメモをとっていただいたりとか、質問をしていただいたりとかして、ニュースで見るだけじゃなくて、こうして資料を持ってきて話していただくことで、よりいっそう深める、自分の考えを深めていったりとか、理解を深めていくいいきっかけに、やっぱりさっきも言ってもらったんですけど、広島の人、若者が考えるいいきっかけになったんじゃないかと

いうふうに思っております。これによってですね、みなさん、もっとですね、戦争に対する関心であったり、とかいうのを、8月6日も近いことですし、よりいっそう深めていただければというふうに思っております。では、以上で、すべて終了させていただきます。ありがとうございました。(拍手)

5. パネルディスカッションのプロトコルの分析・考察

プロトコルの中の注目すべき発言を取り上げて分析・考察を試みる。

12-「それが、広島に来るということです」というEの短く強い口調の言葉には、被爆三世としての思いが込められているようで、他の討論者との口調の違いがあり、立場や背景の違いが伝わってくる。ただ「それが広島に来るということです」の意味するところは、少しとらえにくいのではないと思われる。13で司会者は、「はい。ありがとうございました。はい、では、他の方の意見は?」とさりりと受け流しているが、他の討論者やフロアの聞き手が共通理解するために、真意を確かめておく必要があったのではないだろうか。また、この発言以降も、Eをはじめ課題を指摘する発言は過去のことを問題にするものが多く出るが、これから何ができるのか、これから何をすべきかを考える必要があり、司会者は、どこかでそのような方向にも持っていく必要があったと思われる。

ただ、これらは言うは易し行うは難しで実際には非常に高度なことであろう。プロトコルの見直し、それをふまえてさらに経験を積む中で身につけていく必要があろう。司会者は、発言をまとめ話をうまく進めようという強い意欲を持っており、このような学びの場を多く設定し、リフレクションを重ねていけば、さらなる高みに導くことが可能になろう。

16-Cの「具体的にどんな、目に見えた成果があったんでしょうか」という発言は、核に関わる現実の改善等につながったのかを問うものであるが、これに対するBやAの答えは人々の意識の変化である。両者のこの認識のずれが、パネルディスカッションを通じて解消されなかったように思われる。

23-司会の「これについては、もう?」という問いかけに反応がなく、他の事柄に関わる質問に移ってしまったのが惜しまれる。論点を明確にしようとする姿勢・聴き方が参加者全員に必要であったのではないか。パネルディスカッションの指導では、この点が重要になろう。

33-ここでのEの発言は、前半と後半で内容が異なっている。司会者は、前半の朝鮮人の慰霊碑にオバマ氏が行かなかったことに関わる問題の押さえをしておく必要があったように思われる。

40-33の発言の後半から40までのEとAのやり取りからも、両者の現実認識のずれを感じられる。Aの発言は素朴に若者一般の思いを表していよう。口ごもってしまうところでは、自分の考えを押し通そうとするのではなく、Eの厳しい質問を正面から受け止めて考えている様子がうかがえる。ディベートでは、この状況はAにとってマイナスとなるが、パネルディスカッションに於いては、このような開かれた正直さ、謙虚さも大切にする必要があろう。それが、共創的な聴き合い、話し合いに結びついていくと思われる。多様な価値観を認め合い、それを乗り越えて共生していける社会を築くためにたいへん重要な事柄であると考ええる。

43-この発言も、課題を指摘する討論者とのずれをより広げてしまうのではないかとと思われる。難しいことではあるが、ここでも論点の整理が必要である。

44-この「国民の命を守るための核保有」という発言は、討論の場の中でそれほど意識されずになされたと思われるが、その問題性を聴き取っていたEから厳しく追及され、55で「その人たちに原子爆弾を落としてもいいという考え方ですか?」と問われることになる。Aは、後に認識を改める発言をすることになる(111)が、この一連のやり取りの中で、いわゆる「核抑止力」や力で力をおさえることの問題性が浮き彫りになっている。このような発言者が「しまった」と感じるような発話をきっかけとしたやりとりも、パネルでの討論を深めることに寄与することがある。フロア参加者にも、疑問点や問題点を確認しながら聴くことが求められた場面であった。このようなAの意見の揺れ、考えを修正する謙虚さが、ディスカッションを意味のあるものになっていることにも着目したい。

57-Eは、一貫して被爆者の視点から発言しており、核爆弾は通常の爆弾とは異なるという主張には説得力があり、核廃絶への強い思いがうかがえる。しかし、ここでの「兵器を持つことに関しては、まあ万国共通だと思うし」という発言に対しては、意見が分かれるはずであるし、また、できれば問題にしたい部分であった。しかし、これに対する言及は他の討論者からも司会からもなかった。注意深く受け止め、問題にしたいところである。

61-この「We」に対する見解の相違にまつわる質問は、オバマ大統領の演説を評価する上で重要であり、論議を深める手立てとなる質問と言えよう。Fは、たいへんよくメモを取っており、またそのメモは、鉛筆でびっしり書かれた話の内容に、青いボールペンで、線が引かれ、気づきが付け加えられていた。話を自分なりに整理し、問題点や食い違いを発見し、論点を見出そうという姿勢がうかがえる能動的なメモである。能動的に聴き、質問するためには、メモも能動的でなければと感じさせるものであった。校種を問わず、このような聞き手の側の主体的・能動的姿勢がアクティブ・ラーニングの意義を高める。全体に広めるための指導が求められると感じた。

65～71-「We」の解釈をめぐるやりとりは、核廃絶への道を見出す上での重要な論議であると思われる。「その演説は自分の中にとどめておくだけじゃなくて、全体というか、他の人に聞いてもらうっていう意味を持っていて、なので、やっぱり、他の人も巻き込んで」というAの発言は、自分たちに何ができるか、何をしなければならないかという問いかけに結びついていく。同時に、「アメリカとしての立場に対しては、やっぱりIを使うべきである」あるいは「第三者の目線で責任転嫁」というEの発言は、原爆投下の当事者であり核保有国であるアメリカの大統領に求めることを伝えようとしている。

82～93-「実際にこの場所に立たないと感じられないものってのは、オバマ大統領にあったと思うので、広島に地に来たことは私はよかったかなと思います」というAの発言に対し、Dは、「2時間だけ広島に来て、5分間だけ資料館見て-中略-何がわかったの?」と返す。これに対しBは「現地に立って話すというのが」と言うと、Eは「立っただけでわかりますか」と問いかける。この問いかけにBは、「立っただけでわからないのは、私たちも同じなんです。実際、広島に住んでいて、原爆のことわかるかって言ったら、実際に体験してないんだから、それはオバマさんも同じで、だからこそ、オバマさんに何ができるかっていう、精一杯考えた結果」と答える。この部分の一連のやりとりは広島訪問の意味を考えさせるとともに、戦争を経験していない世代の在り方を問うものになっている。

96-「何でこの任期の最後のほうに来たのか」という問題は、ここで論じても、話し合いは未来志向のものにならない。この部分での堂々巡りが、今回のパネル全体でもあったように思われる。互いの意見をふまえ、止揚して一歩前に歩を進める、そのような聴き方をするためにはどうすればいいのか、討論者、司会者の在り方、さらには指導者の在り方も問われる点であろう。また、「どっちでその読み取ったかによって、たぶんWeに対する考え方が変わらと思うので-中略-一概には言えない」というまとめ方も、両者の意見をくみ取りながら、議論を収束させようという配慮がうかがえるが、問題の所在を曖昧なままにしてしまう危険性もある。これを司会も「きれいにまとめていただきました」(102)と評価したことにも注意を要するだろう。

103-Eは、「私はやっぱり納得のいくものではなかった」としながらも、「AさんBさんが言ってくれたことに関しても、やはり批判的な意見があまりないっていうのは、私も調べていて思ったこと」とし、被爆者にも異なる見解があることを認めている。それぞれの拠って立つところの違いを乗り越え、共に取り組んでいくことの意味を考えさせる発言である。

104～107-「具体的に何をすべきかっていうことを、これからみなさんと、世界中のみんなが、考えていかなければいけないことだなあと思いました」というDの言葉は、これまでDがオバマ演説を批判してきただけに、これからの具体的取り組みへの萌芽となれらると思う。また、「オバマさんが核廃絶に向かっているいろいろやってるっていうのは、行動してるってのもわかるので、もうちょっと頑張れるようにサポートするってわけでもないですけど、何か自分たちも行動が起これたら」というCの発言についても同様である。学生たちの真剣な表情や、パネルディスカッションまでの事前準備、パネル後の8.6に向けての取り組み等を見ていると、それがけっして言葉だけのものではないと感じる。「聴く」というのは、全人格をかけた行為であるとあらためて感じた。

全体を通してみると、やはりディベート的な応酬に傾いている点は否めない。また、その中での論点のずれも気になるところである。しかし、自らの意見にのみ固執するのではなく、論理的な破綻があれば真摯に相手の意見を受け入れようとする姿勢が見られたことは評価できる。また、参加者全員が精一杯考え、発言しディスカッションを成功させようとする取り組みは、今後に生かせよう。アクティブな学びを組み込むことの意味を再認識させる者でもあった。司会者が、苦勞しつつも精一杯ディスカッションをまとめ上げようとした点についてもその価値を認めたい。このような情意の上に立って、さらに経験を積む中で、認識を深め、技能を高められればと思う。

6. 学習者が書いた意見文の一端

ディスカッションを受けて、学習者が書いた意見文の一端をみておきたい。

それぞれに課された課題

オバマ大統領の広島訪問は、核廃絶への関心を高めるきっかけとなった。ここに成果があったと私は考える。それを顕著に表しているのが、原爆資料館の来館者数である。オバマ大統領が見学した翌日から一か月間の来館者数は、前年の同時期に比べて約40%増加した。外国人に関しては、二倍になったのである。こうした数字から、オバマ大統領の訪問が、日本だけでなく、海外の人々の意識や行動にも変化をもたらしたと言えるのではないだろうか。原爆を投下した国アメリカ、核保有国アメリカ、その国の現職大統領が被爆地で語った言葉の影響力は大きい。だからこそ、これだけ人々の関心を集めることができたと思う。

だが、一方で、それだけの影響力を持つ大統領だからこそ、もっと語ることがあったのではないかと、語るべきだったのではないかという声がある。被爆者へのアンケートでは、演説内容の評価が平均72点という結果になった。演説に関して、私は、冒頭の「死が空から降り」という表現が胸に刺さった。原爆、核兵器＝死ととらえ、斬新でストレートだと感じたからである。だが、被爆者の意見の中には、これが曖昧だと非難するものがあった。このとき、私は、立場による見方の違いを痛感した。被爆者には、被爆者としての思いがある。広島 학생には、学生としての思いがある。

だからこそ、今回の課題に対する考え方も異なる。課題の一つとして、今後の行動が具体的に示されなかったということが挙げられている。実際にオバマ大統領にしか成し遂げられない計画もある。そうだとすれば、私たちにしか解決できない課題もあるのではないかと。それぞれの立場から、今後何をしていくかが、私たちに求められたさまざまな課題であると思う。その中で私は、広島の学生としてヒロシマを伝えられる、その一人になる。

ーパネルディスカッションの内容をよく聴き、そこから自分自身が考えを深めた様子がうかがえる。資料館の入館者数と被爆者の演説内容の評価が具体的に示されており、これはパネリストたちが調べたデータを持ち寄って議論していたことからの学びのようである。内容面、方法面双方に着目して、パネルを聴いていたことが意見文に生かされている。「その中で私は、広島の学生としてヒロシマを伝えられる、その一人になる」という結びも、具体的取り組みの難しさをふまえてのものであることを評価したい。

広島訪問という出発点

オバマ大統領の広島訪問は歴史的な出来事であり、多くの人々の関心を集めたという点で、成果は十分にあったと言えるだろう。ニュース番組などでは、連日、広島訪問が取り上げられ、当日は、私たち学生の会話の中でも話題となった。核兵器廃絶を誰よりも願う被爆者からも比較的高い評価を得ている。

一方で、成果はなかったという声もある。オバマ大統領の演説内容に注目すると、71年前に原爆が落とされたという事実、そして世界中の人々がこの事実と向き合い考えていかなければならないという思いが述べられている。しかし、演説には具体的な政策は含まれておらず、今回の広島訪問に関する感想などもなかった。現在もアメリカなど核兵器を保有する国は多く存在し、核実験も進められている。「核なき世界」の実現にはほど遠い。しかし、具体的な成果を求めるには早すぎるだろう。「核なき世界」を訴えた現職米大統領が広島を訪れたという事実そのものに意味があり、ここが出発点である。

私は昨年、韓国的高校生と共に平和記念資料館を訪れた。見学中、彼らは、「怖い」とつぶやいた。私が幼い頃初めて資料館を訪れたときに感じた気持ちと同じである。原爆の恐ろしさを目の当たりにし、平和を願う気持ちに年齢や国籍は関係ない。実際に自分の目で見てこそ、広島に立ってこそ感じることもある。オバマ大統領にとってもそうであったのではないだろうか。今回の広島訪問は、多くの人が広島を訪れ、平和について考えるきっかけになったはずである。オバマ大統領が広島演説で未来を見つめたように、私たちも未来のために考え、働きかけていかなければならない。核兵器廃絶に向けてまだ課題は多く残るが、重要なのはこれからである。今回の広島訪問が効果をもたらしたと言える日が来るよう、私もできることから取り組んでいきたい。

ーこの作文も、パネルでのやりとりをふまえ、成果と課題の両面から、オバマ演説をみている。その上で、自分自身が韓国の高校生を資料館に案内した経験を述べており、この部分を通してオバマ大統領の心情をより鮮やかに思い描いている。広島で学び者だからこそ書けた作文であると言えるし、このような部分が活かされていることを評価したい。

7. アクティブ・ラーニング導入の成果と課題

今回の授業でのアクティブ・ラーニング導入の成果としての次のような点が挙げられる。

① 学習者の意欲喚起と主体的な学びの場の成立

司会者や各パネラーは、非常に意欲的に取り組み、またフロアの学習者も集中力を切らせることなくディスカッションを傾聴した。その成果は、作文の内容にも反映されている。

② 学習者の視野の広がり多様なものの見方・考え方の理解

パネル・ディスカッションというアクティブな学びを位置付けたことにより、学習者の視野が広がり、様々な見方・考え方を踏まえた上での意見形成が可能となった。また、「認知プロセスの外化」、「見える化」にまではいかないまでも、学習者も指導者も、それぞれの理解のプロセスの違いを垣間見ることができたように思う。

また、課題としては、次の点が挙げられる。

① 効果的な評価の位置付け

紙幅の関係で、本稿では割愛したが、評価は、自己評価及びディスカッションの後の反省会等を中心に行った。ただ、総括的評価が中心となり、診断的評価及び形成的評価が不十分であったことは否めない。ルーブリックの導入も考える必要があるだろう。

② カリキュラム全体の見直し

今回のパネル・ディスカッションをはじめとし、論者は、担当する各科目で、ディベート、ポスターセッション、スピーチ、群読等、様々な活動を取り入れ、アクティブな学びの創出に取り組んできたが、まだ試行錯誤の段階で、カリキュラム全体の中での位置づけは明確ではない。今後の課題である。

注

注1 『学校を改革するー学びの共同体の構想と実践 岩波ブックレット 842』 佐藤学 岩波書店 2012.7 P10

注2 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」 文部科学省 2016.8.26 P45

注3 2012.8 中央教育審議会 P37 用語集

注4 大学教育では「学修」の文字を当てるのが通常だが、本稿は、初等、中等教育も含んで論じるため、特に必要でない限り「学習」に統一する

注5 溝上慎一「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」・『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』 松下佳代編著 勁草書房 2015.1 P32

注6 前掲書 P34

注7 ミハイル・バフチンは、『ドストエフスキーの詩学』 ミハイル・バフチン 望月哲男・鈴木淳一訳 ちくま学芸文庫 1995.3 で「ポリフォニー」、「ポリフォニック」という概念を提示している。